『就実論叢』第四二号　抜刷
就実大学・就実短期大学　二〇一三年二月二八日　発行

〈資料紹介〉

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他（一）

解題・図版・翻刻

加藤美奈子

〈資料紹介〉倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他（一）解題・図版・翻刻

加藤　美奈子

はじめに――倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収与謝野晶子自筆歌稿について

平成二二年度より、本学吉備地方文化研究所事業の一環として、倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」（以下、「泣菫文庫」）資料の調査を継続的に実施して来た。今年度、同資料の原稿・書簡類を中心とした一七〇〇点余を約五五〇〇ファイルの画像データとして記録する作業を完了した。今後、所蔵者である倉敷市（担当部署　文化振興課）と連携し、同文庫を近代文学の貴重な資料群として保存・研究する事業へと繋げて行きたいと考えている。

本論叢第四〇・四一号掲載の拙稿においては、「泣菫文庫」資料の内、与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」および、「湯あかりの後」「土ふみて」について、図版を掲載・翻刻し、初出・所収歌集等について解説を加えた（「倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」（『就実論叢』第四〇号、二〇一一年）、「倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」」（『就実論叢』第四一号、二〇一二年））。いずれも原稿用紙一枚に短歌十首がペン書きされており、調査時には三枚が重ねられていたが、「秋の薔薇」の初出が大正四年九月、「湯あかりの後」の初出が大正二年七月、「土ふみて」の初出は確認されず、「湯あかりの後」と同様、歌集『夏より秋へ』（大正三年一月）への所収歌が見られるなど、発表時期が異なっていた。

本稿において紹介する与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」は、前者が原稿用紙五枚、後者が原稿用紙四枚が重ねられた状態で保存されていたが、署名のある歌稿が含まれ、複数の歌稿がまとめて保管されていたと推測される。「泣菫文庫」所蔵の晶子自筆歌稿は、既に紹介した三枚に今回の九枚を加え、計一二枚が確認されている。「泣菫文庫」には他にも、晶子自筆の随筆原稿や書簡類が含まれているが、稿を改めて紹介したい。

以下、晶子自筆歌稿九枚に解題を付し、図版（後掲**【図版1】**～**【図版9】**）を掲載・翻刻する。歌稿の順序と発表時期は前後するが、解題・図版・翻刻とも、倉敷市作成の「薄田泣菫文庫」の仮目録番号に準じて掲載した。図版については、吉備地方文化研究所による撮影で、倉敷市の許諾を得て掲載している。この場を借りて担当の文化振興課・薄田泣菫顕彰会に御礼申し上げたい。

一　与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他　解題

歌稿「紫影抄」「萱の葉」にそれぞれ重ねられた五枚・四枚の原稿用紙にはいずれも、一マスに一文字ずつインクのペン書きで短歌を記入、一首を二行に収め、総ルビが付されている。

用紙は、九枚とも数ミリの誤差はあるが概ね縦約二六㎝×横約三六㎝の洋紙、「B４」サイズに相当し、青罫の四〇〇字詰原稿用紙である。「紫影抄」の五枚と、「萱の葉」の一枚目以外の三枚はいずれも「十ノ二十　神樂阪（ママ）山田製」と左下欄外に罫線と同じ青で印刷されている。「萱の葉」の一枚目のみ、「秋の薔薇」「湯あかりの後」「土ふみて」（前掲）と同様に「十ノ廿　松屋製」と左下欄外に罫線と同じ青で印刷されている。

「紫影抄」は、原稿用紙一枚目**【図版1】**一行目に「紫影抄」と題があり、改行して「与謝野晶子」と署名、欄外に「一度にお載せ下さい」朱書（ペンではなく朱筆）されている。一枚目は九首、二枚目**【図版2】**は六首、以下八行が余白、この二枚が「紫影抄」と題された計一五首の詠草である。「一度に」という指定があるが、実際は、『定本　與謝野晶子全集』第一巻―第二〇巻（講談社、昭和五四―五六年、以下『全集』）によると、「大阪毎日新聞」大正一〇年一月七日・一二日・一六日・一八日の四回に亘って三首ずつ計一二首が掲載され、内二首が晶子一八番目の歌集『草の夢』（大正一一年九月）に収められている。三首が『全集』未掲載である。

三枚目**【図版3】**は、一行目に「〇」印と「与謝野晶子」の署名、詠草の十首目が四枚目**【図版4】**にわたっている。四枚目は、さらに八首、以下三行が余白、二枚で計一八首の詠草である。この内の六首が「明星」（第二次、大正一〇年一一月）に「草枕」と題して掲載され、内五首が『草の夢』（前掲）に収められている。同歌集にはさらに、この歌稿から五首が収められている（初出は不明）。残る七首については『全集』未掲載である。

五枚目**【図版5】**は、無題・無署名で六首、以下八行が余白である。

「大阪毎日新聞」大正一〇年五月二九日に後半の三首が掲載、歌集には未収録である。前半の三首が『全集』未掲載である。

「萱の葉」は、原稿用紙一枚目【図版6】右側欄外に「萱の葉」と題があり、同じく右側欄外下方に「与謝野晶子」と署名、一枚に十首が収められている。この書式は、「秋の薔薇」（前掲）と共通し、原稿用紙も前述のように、今回の歌稿の内では唯一「松屋製」が用いられている。初出も「秋の薔薇」（初出「大阪毎日新聞」大正四年九月二六日）と比較的近く、大正五年七月一〇日・三一日の二回に亘って三首ずつ計六首掲載、六首とも晶子一五番目の歌集『晶子新集』（大正六年二月）に所収されている。残る四首の内一首は、雑誌「婦人畫報」（大正五年八月）に掲載、『晶子新集』（前掲）に収められている。同歌集にはさらに二首が所収され（初出は不明）、残る一首が『全集』未掲載である。

二枚目【図版7】は、一行目に「〇」印、二行目に「与謝野晶子」と署名、一枚に九首が収められている。「大阪毎日新聞」大正一〇年七月二日・五日の二回に亘って三首ずつ六首掲載、歌集には未所収である。残る三首の内、二首が『草の夢』（前掲）所収（初出は不明）、一首が『全集』未掲載である。

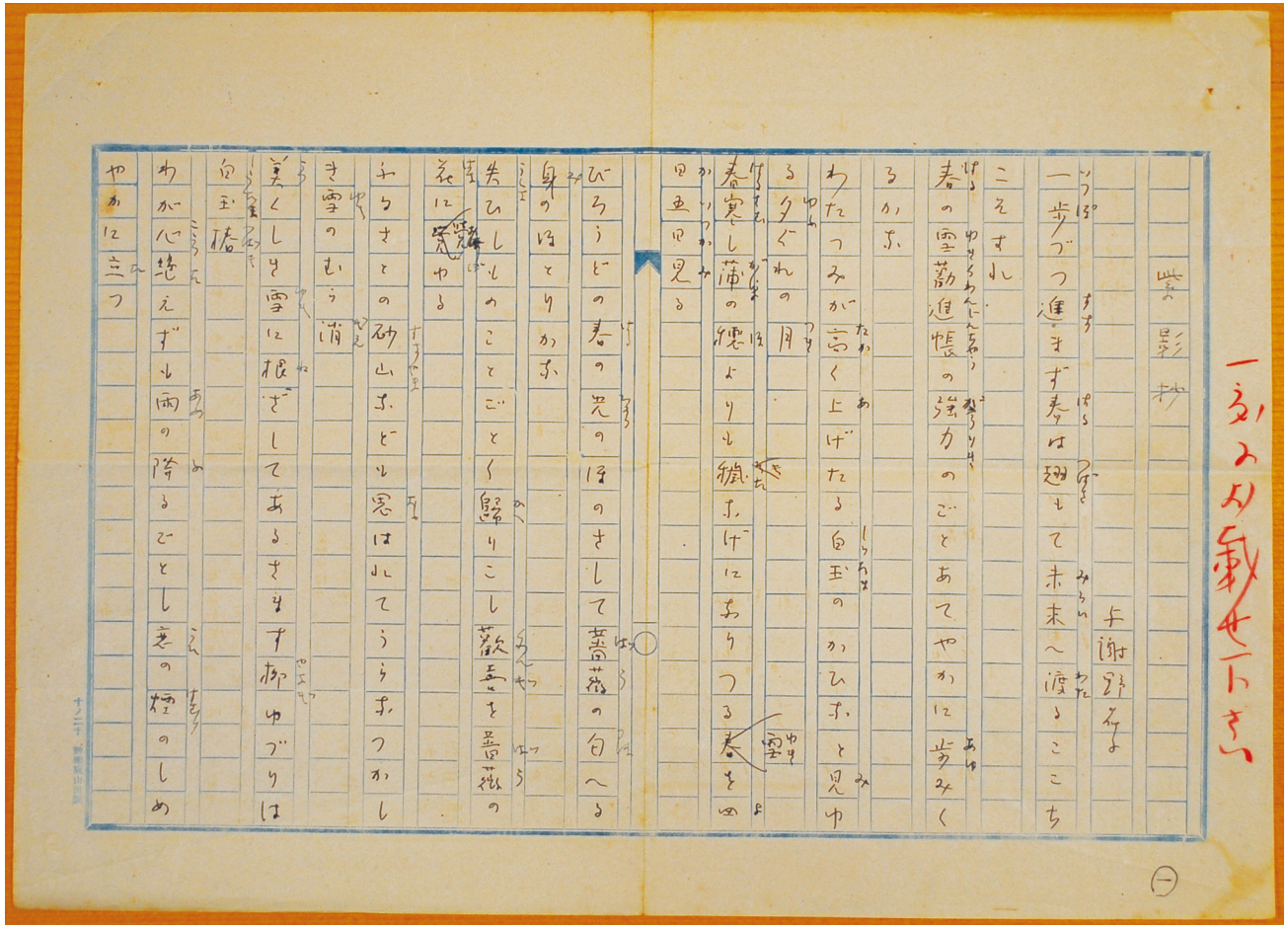
三枚目【図版8】は、右側欄外に「〇」印、同じく右側欄外下方に「与謝野晶子」と署名、一枚に十首が収められている。「大阪毎日新聞」大正六年五月二一日に「皐月雨」と題して十首総て掲載、内四首が晶子一六番目の歌集『火の鳥』（大正八年八月）に所収されている。四枚目【図版9】は、一行目が他の歌稿の続きと思われる一首の最後の部分から始まり、他に五首、以下九行が余白である。「大阪毎日新聞」大正七年八月二五日に前半三首、三一日に後半三首掲載、歌集には未所収である。

本論叢前号において「湯あかりの後」については二首、「土ふみて」については四首の未公表短歌を含む可能性のある自筆歌稿であることに言及したが、今回の九枚の自筆歌稿についても、前述の計一五首が『全集』未掲載であり、未公表短歌である可能性が指摘出来る。また、初出・所収歌集の確認出来る作品についても、新聞・雑誌掲載歌、歌集所収歌との間にそれぞれ表現の異同が見られる。次号で異同の詳細を示し、内容についての解説を加えたい。

二　与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他　図版・翻刻

次頁より、与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」【図版1】～【図版5】、「萱の葉」【図版6】～【図版9】を掲げ、後に翻刻をまとめて示した。翻刻における改行等は歌稿に準じている。字体は新旧ともに歌稿に準じ、新旧の字体が判別し難い場合は概ね旧字体としている。●は文字の修正箇所で、修正前の文字が不明であることを示し、修正後の文字の前に示した。また、修正前の文字が判読出来る場合、元の文字を（　）で修正後の文字の前に示した。行外に挿入文字が示されている場合、修正箇所の下に〔　〕で示した。

【図版1】



一部みな載せ下さい

紫影抄

上野謝野

一歩づつ進まず春は翔もて未来へ渡るここちこそすれ

春の雲翁逍遥の強力のごとあてやかに歩みくるかな

わたつみが高く上げたる白玉のかひなと見ゆる夕ぐれの月

春寒し蒲の穂よりも細ふけにあらつる春雲をぬ白玉見る

びろうどの春の光の仔のさして薔薇の白へる身のほとりかな

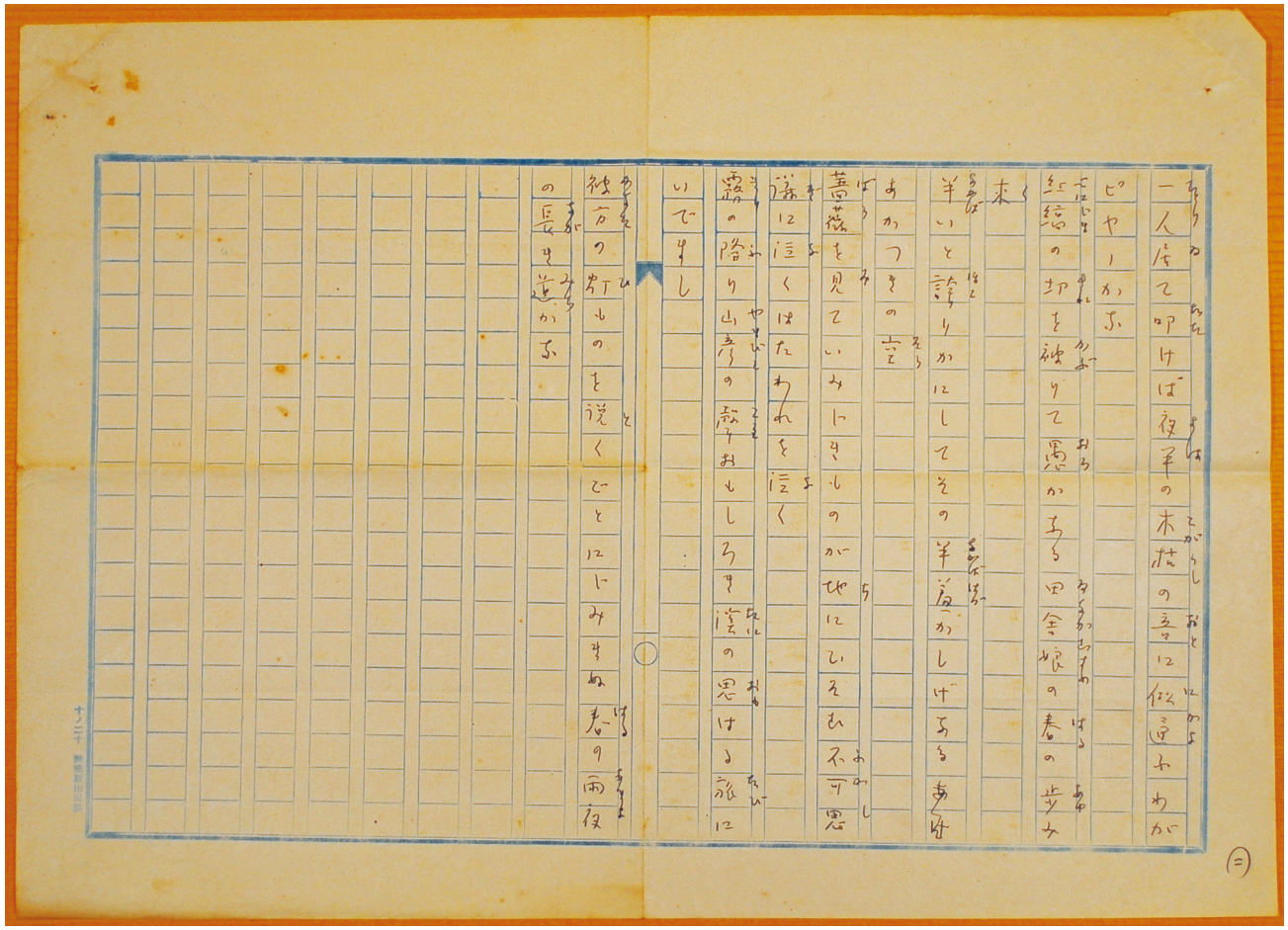
失ひしものことごとく帰りこし歓喜を薔薇の花に賛やる

ふちさとの砂山ふどる窓はれてうらふつかしき雲のむら消

美くしき雲に根ざしてあるさます柳ゆづりは白玉椿

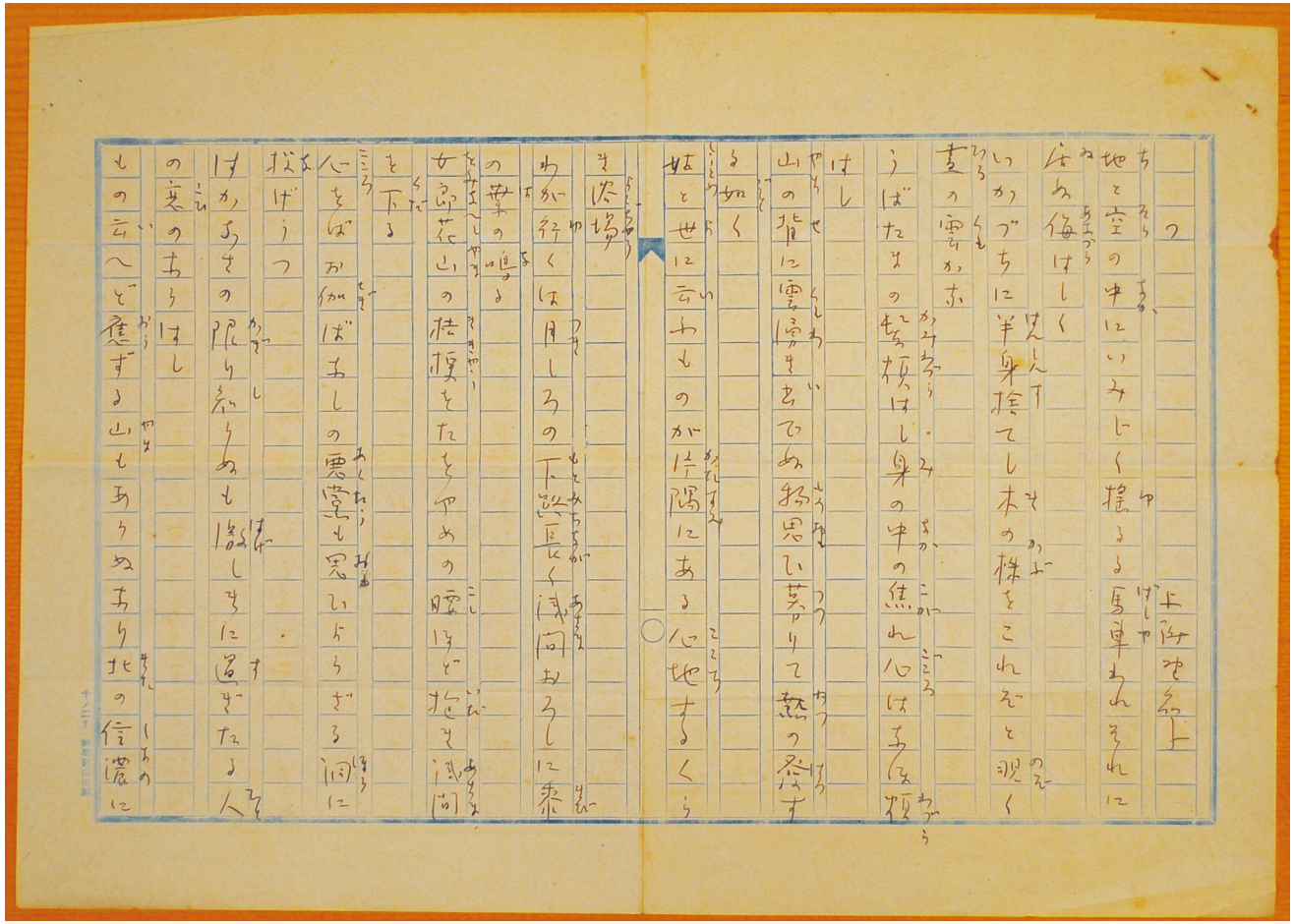
わが心絶えずも雨の降るごとし老の煙のしめやかに立つ

【図版2】



一人居て叩けば夜羊の木戸の音に似通ふわが
ピヤノかな
紅葉の坂を被りて愚かなる田舎娘の春の歩み
来
羊いと詩りかにしてその羊飼かしげなる夢
あかつきの空
薔薇を見ていみじきものがたりにいそむ不可思
議に泣くばたわれを泣く
霧の陰り山彦の啟ぶおもしろき笛の思ける旅に
いでましし
彼方の灯もものを説くごとにいみじき春の雨夜
の長き笛かな

【図版3】



つ

上阿蘇紀行

地と空の中にいみじく揺るる馬車ありそれに
乗り侍はしく
いかづちに半身捨てし木の株をこれぞと覗く
麦の雲が赤
うばたまの柿はし果の中の焦れ心はあるる柿
はし
山の背に雲湧きたてあり孤思い茅りて熱の咎す
る如く
姑と世に云ふものが住隅にある心地するくら
き境
わが行くは目しろの下路長く浅間おろしに乗
の葉の鳴る
女郎花山の柿樹をたもやめの暗ほど拾を浅間
を下る
心をば御伽ばなしの悪堂も思いらざる間に
投げうつ
はかなきの限り知りあも悩しきに置きたる人
の恋のあらはし
もの云へど意ずる山もあらぬあり北の信濃に

【図版4】

夜をもつ寝る

秋野にある花ははかなし一草をあまず山の風に頃ふ

たかくと微笑の薔薇のもとにある夢幻の木が知るよしもなし

明星の光郎公はたおのれ殊更めくとたのしむ

われは

われさびし見る日来らずいつしかと文が運び

し香料も書く

雲停けば忽ち雨すゆとりあきあるを心の初秋

の宮

夏草を強人のごと憎あどもその主人より大高

くある

山の端に残月のごと黄昏の光たたよい而ふり

いでぬ

夕月の光の中に佛間山ゆるぎをいくる心地こ

そすれ

【図版5】

胡地にして木無き草土を踏む詩の今うちつけに思はるるかな

わが手して開くべき戸の多かるに倦みて花咲く園に眠れり

磨くべきものと知りしに人来りさかしらすれば云ひばすた顧みず

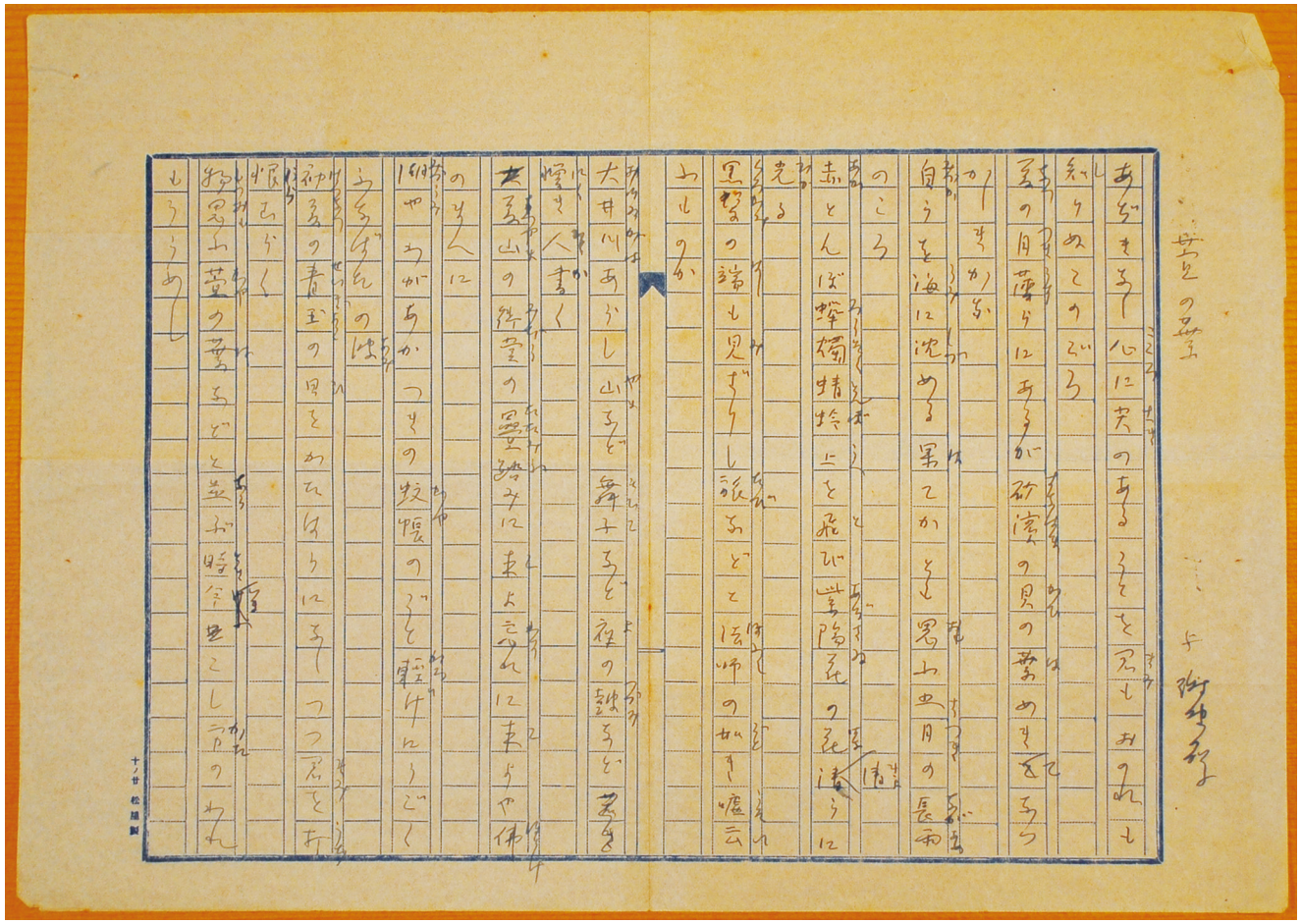
わが宮の三尺住きところにて思ひ惑ける わたつみの波

手を組みて空を眺むる負ひ蕾花傷せたる蕾花

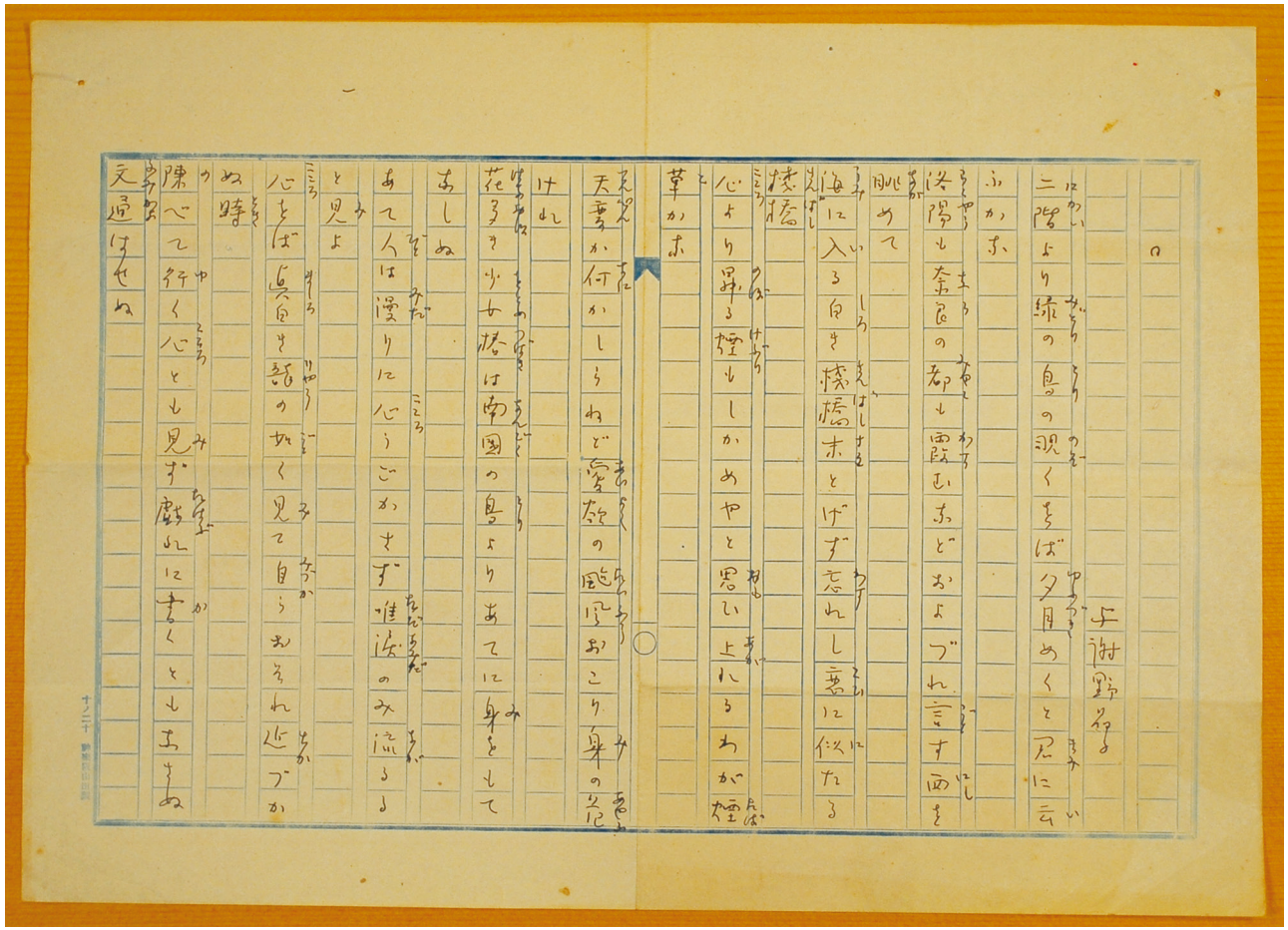
もあるかなまりけれ

何にせよ天へうんたるものとふく俗に心くづまれて泣く

【図版6】



【図版7】



の

二階より緑の島の現くまぼ夕月めくと君に云ふかふ

夕陽も奈良の都も霞むおどおよづれ言ず面を眺めて

海に入る白き樓橋ホとげず忘れし喜に似たる樓橋

心より昇る煙もしかめやと思い上れるわが煙草かホ

天竺か何かしらねど愛敬の風雅おこり昇の花けれ

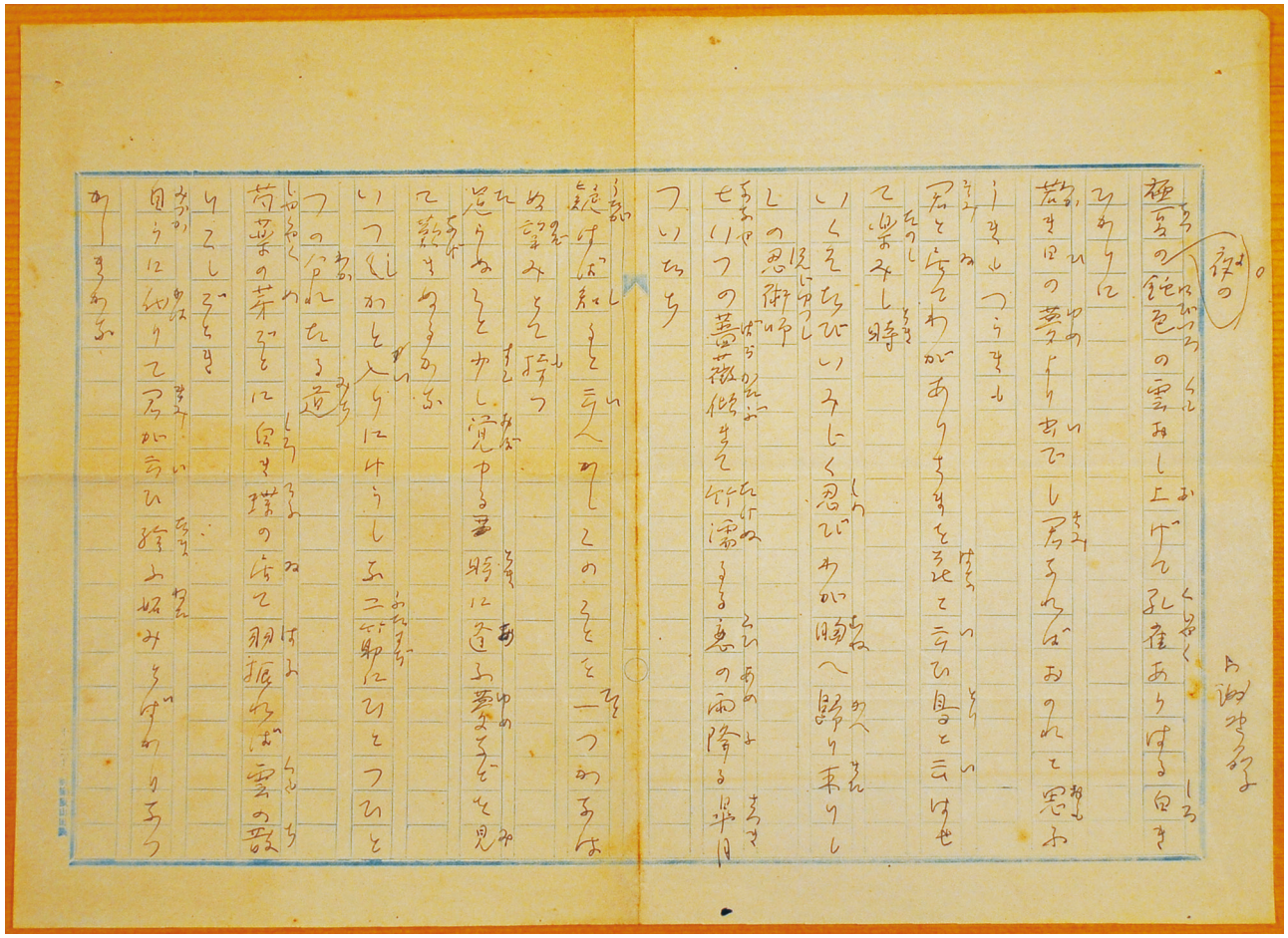
花多き少女塔は南国の島よりあてに身をもてあしぬ

あて人は漫りに心うごかさず唯浪のみ流るると見よ

心をば眞白き紙の如く見て自らおそれ近づかぬ時

陳べて行く心とも見ず戯れに書くとも出ぬ足過はせぬ

【図版8】



極楽の絶色の雲おし上げて孔雀あらはる白き
ひかりに
蓮の花の蕚より出でし君なればおのれと思ふ
うきしつうきし
君と共をわがありきをそれと言ひ昔と言はせ
て必ずみし時
いくそたびいみじく思ひわが胸へ歸り来りし
しの思衛門
セリフの薔薇微笑まで流るる恵の雨降る星月
ついちち

夜の

白鳥

疑ひ知れもて言へ　このことを一つのことは
ぬ望みを持つ
思うなとかし覚ゆる事特に道ふ夢をそれを見
て驚きあるかな
いつしかと入りにけうしふ二人知にひとつひと
つの分たる道
苔蕚の茅ぶとに白き蕚の声て羽振わば雲の数
りてしごとき
見うに知りて君が言ひ珍し好みそばかりあり
あるふ

【図版9】

【図版1】翻刻

〔欄外朱書〕一度にお載せ下さい　〔欄外〕㊀

紫影抄

与謝野晶子

一歩づつ進まず春は翅もて未來へ渡るここちこそすれ

春の雪勸進帳の強力のごとあてやかに歩みくるかな

わたつみが高く上げたる白玉のかひなと見ゆる夕ぐれの月

春寒し蒲の穂よりも●穢なげになりつる（春）〔雪〕を四日五日見る

びろうどの春の光のほのさして薔薇の匂へる身のほとりかな

失ひしものことごとく歸りこし歡喜を薔薇の花に（覚）〔覺〕ゆる

ふるさとの砂山なども思はれてうらなつかしき雪のむら消

美くしき雪に根ざしてあるさます柳ゆづりは白玉椿

わが心絶えずも雨の降るごとし恋の煙のしめやかに立つ

【図版2】翻刻

〔欄外〕㊁

一人居て叩けば夜半の木枯の音に似通ふわがピヤノかな

紅縞の切を被りて愚かなる田舎娘の春の歩み來

半いと誇りかにしてその半羞かしげなる（あけ）あかつきの空

薔薇を見ていみじきものが地にひそむ不可思議に泣くはたわれを泣く

霧の降り山彦の聲おもしろき溪の思はる旅にいでまし

彼方の灯ものを説くごとにじみきぬ春の雨夜の長き道かな

【図版3】翻刻

○　与謝野晶子

地と空の中にいみじく搖るる馬車われそれに
居ぬ　侮はしく
いかづちに半身捨てし木の株をこれぞと覗く
晝の雲かな
うばたまの髪煩はし身の中の焦れ心はなほ煩
はし
山の背に雲湧き出でぬ物思ひ募りて熱の發す
る如く
姑　と世に云ふものが片隅にある心地するくら
き浴場
わが行くは月しろの下路長く浅間おろしに黍
の葉の鳴る
女郎花山の桔梗をたをやめの腰ほど抱き浅間
を下る
心をばお伽ばなしの悪黨も思ひよらざる洞に
投げうつ
はかなさの限り知らぬも激しきに過ぎたる人
の恋のならはし
もの云へど應ずる山もあらぬなり北の信濃に

【図版4】翻刻

夜を五つ寝る
裾野なる花ははかなし一草をあまさず山の風
に順ふ
君がこと浅間の嶽のふもとなる落葉松の木が
知るよしもなし
明星の光郭公はたおのれ殊更めくとたのしむ
われは
われさびし見る日來らずいつしかと文が運び
し香料も盡く
雲湧けば忽ち雨すゆとりなきわかき心の初秋
の空
夏草を盗人のごと憎めどもその主人より丈高
くなる
山の端に残月のごと黄昏の光ただよひ雨ふり
いでぬ
夕月の光の中に浅間山ゆ●〔る〕ぎ出でくる心地こ
そすれ

【図版5】翻刻

胡地にして木無き荒土を踏む旅の今うちつけ
に思はるるかな
わが手して開くべき戸の●多かるに倦みて花
咲く園に眠れ（り）〔り〕
磨くべきものと知りしに人來りさかしら（すれ）〔云へ〕
ばまた顧みず
わが岩の三尺低きところにて思ひ歎けるわた
つみの波
手を組みて空を眺むる白き薔薇痩せたる薔薇
もあはれなりけれ
何により支へられたるものとなく俄に心くづ
されて泣く

【図版6】翻刻

〔欄外〕萱の葉　　与謝野晶子
あぢきなし心に尖のあることを君もおのれも
知りぬこのごろ
夏の月薄らにあるが砂濱の貝の葉めき（て）〔て〕なつ
かしきかな
自らを海に沈める果てかとも思ふ五月の長雨
のころ
赤とんぼ蝋燭蜻蛉上を飛び紫陽花の花（清）〔清〕らに
光る
黒髪の端も見ざりし旅などと法師の如き嘘云
ふものか
大井川あらし山など舞子など夜の皷など（若き）
憎き人書く
●夏山の御堂の疊踏みに來よ忘れに來よや佛
のまへに
湖　やわがあかつきの蚊帳のごと輕げにうごく
ふなばたの波
初夏の青玉の日をかたはらになしつつ君を打
恨　むらく
物思ふ萱の葉などと並ぶ時今（日）こし方のわれ
もうらめし

【図版7】翻刻

○

与謝野晶子

二階より緑の鳥の覗くをば夕月めくと君に云
ふかな
洛陽も奈良の都も霞むなどおよづれ言す西を
眺めて
海に入る白き棧橋末とげず忘れし恋に似たる
棧橋
心より昇る煙もしかめやと思ひ上れるわが煙
草かな
天変か何かしらねど愛欲の颱風おこり身の危
けれ
花多き少女椿は南國の鳥よりあてに身をもて
なしぬ
あて人は漫りに心うごかさず唯涙のみ流るる
と見よ
心をば眞白き龍の如く見て自らおそれ近づか
ぬ時
陳べて行く心とも見ず戯れに書くともなさぬ
文通はせぬ

【図版8】翻刻

〔欄外〕○　　与謝野晶子

（夜）夏の〔夜の〕鈍色の雲おし上げて孔雀あらはる白き
ひかりに
若き日の夢より出でし君なればおのれと思ふ
うきもつらきも
君と居てわがありさまを花と云ひ鳥と云はせ
て楽みし時
いくそたびいみじく忍びわが胸へ歸り來りし
この忍術師
七八つの薔薇傾きて竹濡るる恋の雨降る皐月
ついたち
疑はば知ると云へかしこのことを一つかなは
ぬ望みとて持つ
足らぬこと少し覚ゆる●時に逢ふ夢などを見
て歎きぬるかな
いつ●〔し〕かと入りにけらしな二筋にひとつひと
つの分れたる道
芍薬の芽ごとに白き蝶の居て羽振れば雲の散
りこしごとき
自らに代りて君が云ひ給ふ妬みとばかりなつ
かしきかな

【図版9】翻刻

る火の地獄より
この頃の初秋のかぜ朝夕心にものの足らぬ身
を吹く
かたはらへ白きものをば積みに來る秋風とし
も思ひけるかな
五間ほど後に野馬の息ありてせせらぎのごと
晝の虫啼く
秋風の〔冷〕〔つめた〕き沓に踏れたる雑草を見て〔物〕〔もの〕を思ひ
ぬ
川霧の上に七八つ薄く濃く藍色の山（並ぶ）な
らぶ朝かな